
IS インフィニット・ストラatos ~暁の空~

オルド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

「IのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IIS インフィニット・ストラトス ～暁の空～

【EZコード】

N5484Q

【作者名】

オルド

【あらすじ】

女性にしか反応しない世界最強の兵器『インフィニット・ストラトス（IIS）』の出現後、男女の社会的パワーバランスが一変し、女尊男卑が当たり前になってしまった時代。織斑一夏は男性なのにIISを起動させてしまい、IIS学園に入学させられる。一夏がIIS学園に入学した次の日、一人の男がIIS学園に入学した。その男は一夏同様IISを機動させることができて、しかも行方不明になつていた一夏と第の幼馴染だった！一人の男とIIS学園の女性たちの物語が始まる。

プロローグ（前書き）

これは私の初投稿作品です。未熟なため至らぬ点が多いと思いますが、日々精進していきますので、これからよろしくお願いします。

プロローグ

空港にある巨大なテレビには数人の女性が写っており、最近の政治について激しい討論をしている。

その討論から急に画面が切り替わり、一人の女性アナウンサーが写る。

「今放送している番組を中断して、緊急ニュースを放送します。現在行方不明である篠乃之博士から声明が発表されました。今からその声明をながします。

「はーい、現在絶賛行方不明中の天才、篠乃之束でーす！最近『世界で唯一 IIS を使える男』というのがニュースになっているけど、IIS を使える男の子はもう一人いるんだよねー、実はー！それで、その子を IIS 学園に入学させることにしたから。あ、でもね、その子に何かあつたら絶対に、ゼーつたいて一度と『ア』を作らないから、そのつもりでよろしくー。それじゃあねー。」

この声明が事実だとすれば、世界に一人 IIS を使える男がいることになります。現在 IIS 学園に各国からの問い合わせが殺到していることがあります。以上で緊急ニュースを終了します。引き続き番組をお楽しみください。」

画面が先程の討論に切り替わった。

空港のロビーで緊急ニュースを見ていた一人の男が呟く。
「わざわざ声明を出さなくともいいのに、束さんは相変わらずよくわからないな。」

そして、カバンを背負いなおし空港の入り口に向かう。
「タクシーに乗って駅まで行って、それから電車で IIS 学園まで行かないといけないんだったな。だいたい一時間くらいか？」

確認するように言い、入り口を出てタクシー乗り場に行き、タクシーに乗り込む。

タクシーの運転手に最寄りの駅に向かうように伝えて、座席に深く座りこんだ。

「千冬さんに一夏、それに篠の三人は元気かな。」

自分の幼馴染とその姉の顔を思い浮かべながら呟き、眠るために目を閉じた。

プロローグ（後書き）

とりあえずプロローグを投稿しました。次回の投稿は三日後くらいになると思います。私の小説がより多くの人に読んでいただけたら幸いです。

第一話 到着（前書き）

前回の後書きの件をすみません。短い文章ですが、
お楽しみください。

第1話 到着

「ここが IIS 学園か」

俺は IIS 学園の正面ゲートから学園内に入つて立ち止まり、学園内を見渡してみる。

初めて入つて来た人は確実に迷うな。

そんなことを思いながら、歩いていると学園の校舎の入口に見知つた顔を見つける。

「お久しぶりです。千冬さん」

「ああ。6年ぶりだな。IIS を使える男といつのは、やはりお前ことだったか」

「はい。そうですよ」

「この人は織斑千冬さん。俺の幼馴染織斑一夏の姉で会つのは実に6年ぶりになる。

「入学式に出れないのは仕方ないが、一日目は遅刻せずに来い」

パンツ！

「頭を叩かないでくださいよ。俺だって昨日東さんに

「いつくんが IIS 学園に入学したから、かーくんも入学してきてね！」

！

つて言われて来たんですから」

俺の言葉に千冬さんが呆れたようにため息をつく。

「まあ、いい。とりあえずついて来い。お前には制服とかいろいろと渡さないといけないんでな

「はい」

俺は返事をして、千冬さんについて行く。

「ああ、それと学園では織斑先生と呼べ。いいな」

「千冬さん、訂正織斑先生が振り返りそうじゃ」

「わかりました。織斑先生」

俺は返事をしつつ、後をついて行つた。

第1話 到着（後書き）

今日から1回1回のペースで投稿しようと思います。応援よろしくお願いします。

第2話 再会（前書き）

第2話は第1話と比べて文章量が減くなっています。また、小説の書き方も少し変えていきます。

あの後、書類にサインをしたり、制服に着替えたりして、千冬さんと山田真耶先生（さつき職員室で自己紹介をされた）の案内で教室の前に到着する。

俺が入るクラスは一年一組だそうだ。千冬さんに聞いてみたところ、一夏と篠も一組らしい。

「いいで待つていろ。呼んだら入つて来い。」

「はい」

返事をして、千冬さんと山田先生が教室に入つて行くのを見届ける。

俺は呼ばれるまでの間、久しぶりに会つ幼馴染のことを考えて待つことにした。

side 一夏

「ねえねえ、織斑くんあ！」

「はいはーい、質問しつもーん！」

「今日のお昼ヒマ?放課後ヒマ?夜ヒマ?」

昨日の様子見は終わりを告げたのか、山田先生が教室を出るなり女子の半数がスタートダッシュ、俺の席に詰めかける。

今、『もう出遅れるわけにはいかないわ!』とか聞こえたのは、錯覚じゃないんだろうな……。

昨日からいろいろと散々な目にあつていいなと思つ。

クラス代表を決定するためにセシリ亞と対戦することになるし、

寮の部屋は千冬姉と同室で休んだ氣はしないし、入学初日から大変だった。

束さんが声明で言つてたもう一人の男子がいれば少しさは違つんだろつけど。

朝食の時に笄に聞いたら知らないって言つて、いつたい誰が来るんだ？

「…………」

俺を囲む集団を少し離れた位置で見ているのが、幼馴染こと笄だ。朝食の時に束さんの名前を出したとたん不機嫌になつてしまつた。

（笄つて束さんのこと、嫌いだつたけ……？）

そう思つてゐる間も女子の早く質問にこ答えてという視線が非常につらい。

とりあえず耳に入つた質問に答えればいいか。

「千冬お姉さまって自宅ではどんな感じなのー？」

「え、案外だらしな」

「パンツ！」

「休み時間は終わりだ。散れ」

おお、いつの間に背後に。しかもこのタイミングの叩きはあれか。個人情報をばらそうとしたからだろうか。

それにも千冬姉ずっとそんな事をしていると叩きキャラとして印象がつくぞ。いいのかそれで、いいのか。

「さて授業を始める前に転校生を一人紹介するぞ。」

そんなことを考えていると千冬姉がそつ一言言つた。

「あ、あの、もしかして篠ノ乃博士が声明で言つていた男の子ですか？」

クラスがざわつく中、クラスメイトの一人がうれしさを抑えきれない様子で質問する。

「その通りだ。とある事情により入学式に間に合わなかつたため、今日から通うことになつた。」

千冬姉の言葉にさらりとクラスがざわつく。

「馬鹿ども、静かにしろ。転校生入つてー！」

千冬姉に怒られ、クラスが静まる中、教室のドアから入つてきたのは行方不明になつていた幼馴染だった。

叩かれたんだろうな。

「馬鹿ども、静かにしろ。転校生入つてー！」

千冬さんの呼ぶ声が聞こえたし、教室に入るかな。

俺がドアを開けて教室に入ると、クラスメイト全員（一組の男女を除外する）が驚きの表情をしていた。

その除外した一組の男女、一夏と篝は信じられないものを見るような顔をしている。

「転校生、自己紹介をしろ」

「鷹野一騎だ。いろいろと迷惑をかけると思が、これから一年間よろしく頼む」

「一、騎、なのか……」

俺が自己紹介をすると、一夏が先ほどの表情のまま呟いた。

「ああ、久しぶりだな、一夏」

「お前今までどこにいたんだよ。俺や千冬姉がどれだけ心配し

」

一夏が急に立ち上がり怒鳴るように言つたが、

「パンツ！」

「席に着け、馬鹿者。それと、織斑先生と呼べ」

「……わかりました。織斑先生」

千冬さんに叩かれて、しぶしぶ席に座る。

「鷹野への質問は休み時間にしろ、いいな。鷹野の席は窓際の最後尾だ

「わかりました」

俺は千冬さんに返事をして席に向かつ。

向かう途中に幕のほうに目を向けてみるとまだ先ほどの表情のままでこちらを見ていたが、俺の視線に気づくとすぐさま窓の外に顔をそらした。

顔をそらされたことに少しショックを受けて、俺は席に着く。

俺が席に着いたのを確認すると千冬さんが一夏に話しかける。

「ところで織斑、お前のＩＳだが準備まで時間がかかる」

「へ？」

「予備機がない。だから、少し待て。学園で専用機を用意するそ
うだ」

「？？？」

なんていきなり一夏のＩＳの話になるのかわからず首をかしげる
と、教室がざわめいた。

「せ、専用機！？一年の、しかもこの時期に！？」

「つまりそれって政府からの支援が出てるってことで……」

「ああ～。いいなあ……。私も早く専用機欲しいなあ」

一夏が全く意味がわからないという様子でいると、見るに堪えかね
たという感じで千冬さんがため息混じりにつぶやく。

「教科書六ページ。音読しる」

「え、えーと……『現在、幅広く国家・企業に技術提供が行われ
ているＩＳですが、その中心たるコアを作る技術は一切開示されて
いません。現在世界中にあるＩＳ４６７機、そのすべてのコアは篠
ノ之博士が制作したもので、これらは完全なブラックボックスと化
しており、未だ博士以外はコアを作れない状況にあります。しかし
博士はコアを一定数以上作ることを拒絶しており、各国家・企業・
組織・機関では、それぞ割り振られたコアを使用して研究・開発・
訓練を行っています。またコアを取引することはアラスカ条約第七
項に抵触し、すべての状況下で禁止されています』……」

「つまりそういうことだ。本来なら、ＩＳ専用機は国家あるいは企
業に所属する人間しか与えられない。が、お前の場合は状況が状況
なので、データ収集を目的として専用機が用意されることになった。

理解できたか？」

「な、なんとなく……」

教科書にはそう書かれているが実際は違う。俺のＩＳを含めればＩＳは世界に468機存在しているし、コアも俺のＩＳを作るときに新しく作ったものを使っている。

「あの、先生。篠ノ之さんって、もしかして篠ノ之博士の関係者なんでしょうか……？」

女子の一人がおずおずと千冬さんに質問する。

その質問に俺は少し驚いた。てっきり入学初日にバレていると思つていたんだが……。

そう思いながら、篠の方に顔を向ける。

「そうだ。篠ノ之はあいつの妹だ」

千冬さんが質問を肯定すると、クラスが驚きの声に包まれる。

「ええええーーーす、すーじーーー」のクラス有名人の身内が一人もいる！

「ねえねえっ、篠ノ之博士ってどんな人！？やつぱり天才なの！？」

「篠ノ之さんも天才だつたりする！？今度ＩＳの操縦教えてよっ」

一気に篠の元にわらわらと女子が集まる。

実際の姿を見ていないからこれだけ人気があるんだろうな。束さんの生活態度を見ていれば、ただの引きこもりにしか見えないのに。

「あの人は関係ない！」

突然の大声に篝に群がっていた女子は、何が起ったのかわからない様子をしている。

「……大声を出してすまない。だが、私はあの人じゃない。教えられるようなことは何もない。」

そう言つて、篝は一瞬だけ俺の方に顔を向けると、また窓の外に顔を向けてしまう。

女子は盛り上がったところに冷水を浴びせられた気分のようで、それぞれ困惑や不快を顔にして席に戻つていった。

（束さんと篝つて仲が悪かつたか……？）

一人きりの時は知らないが、俺と三人でいた時の仲はそんなに悪くなかつたと思う。

「さて、授業を始めるぞ。山田先生、号令」「は、はいっ！」

山田先生も気になる様子のよつだつたが、号令をして、授業を始めた。

（まあ、休み時間にいろいろと説明しないといけないし、その時に聞いてみればいいか……）

そう思い、退屈になるであらう授業を聞き始めた。

第2話 再会（後書き）

まずははじめに、第2話を読んでいただき、ありがとうございます。

読者の皆様にお知らせというかお願いがあります。

作者は素人のため、まだ小説の書き方や文章量など手探りの部分が多くあります。

そのため一話ごとの書き方や文章量が異なる場合があります。

自分の書き方が定まり次第、以前投稿した小説を加筆、修正します。

どのような書き方や文章量が読みやすいのかを感想で書いていただけたら、すべての意見を受け入れることはできませんが、できる限り参考にさせていただきますのよろしくお願いします。

第3話 説明（前書き）

思つていたより書くのに時間がかかってしまった。
みなさん第3話をお楽しみください。

第3話 説明

「一騎、今まどじりで、何をしていたのかちゃんと説明してやがりからな」

休み時間になると、一夏はすぐさま俺の席に来て俺の肩をつかみやつぱつた。

「逃げも隠れもしないし、ちゃんと説明するから肩をはなせ」

やつぱつと一夏は俺の肩から手を離す。

「織斑君と鷹野君は知り合いなの？」

周囲で様子を見ていたクラスの女子の一人が聞いてくる。

「一夏と篝は俺の幼なじみだ」

そう答えると、金髪の偉そうな態度の女子が俺の席に来て、話しかけてくる。

「幼なじみだとやつぱつなら、あなたもこの男と同じで無礼なのでしょうね」

「初対面の相手を無礼と決めつけるやつが、失礼だと思つたが」

俺がやつぱつと、今度は一夏のほうを向き、話しかける。

「それにしても安心しましたわ。まさか訓練機で対戦しようとは思

つていなかつたでしょ「うけべ」

「夏はさうでもこいという顔をしながら、その女子の話を聞いていな。

「まあ？一応勝負はみえていますけど、さすがにフェアではありますか？」

「りませんものね」

「？ なんですか？」

「あら、ご存じないのね。いいですわ、庶民のあなたに教えて差し上げましょ。このわたくし、セシリア・オルコットはイギリスの代表候補生……つまり、現時点で専用機を持つていますの」

「へー」

「……馬鹿にしていますの？」

「いや、すげーなと思つただけだけだけ。ビーヴィーのかはわからな
いが」

「それを一般的に馬鹿にしてると云つのでしょうか？」

「ババーン！ 両手で俺の机を叩く。叩くのなら自分の机にしてくれないか。

「……こほん。あなたなら専用機持ちがビのくらいす、こいかわかりますよね」

「……世界にFHSは467機しかない。だから、その中で専用機持つものはエリートだとでも言いたいのか」

「そうですね」

俺の言葉に調子を取り戻したのか、腰に手を当ててさう言つた。

「一騎、そうなのか？」

「まあ、そう考える人もいるだうつな。俺も専用機を持つてゐるが、

別にエリートだと、す「」いとか思つた」とはないけど「ババーン！」

「な、なんであなたが専用機を持っているんですかーーー？」

一夏に聞かれ、俺が答えると俺の言葉に金髪（めんべい）から（の呼び方でいいか）が反応して机を叩く。

金髪の言葉が聞こえたのか、周りの女子が騒ぎ始める。

「た、鷹野君も専用機をもつてるの！？」

「もしかして企業に所属しているとか？」

「どこの国の代表候補生だつたりしてーーー？」

金髪が納得がいかないという様子で聞いてくるが、

「どういうことか説明していただきますわ

「俺があんたに説明する理由がないな」

俺がそう答えるとキッ、とこちらを睨んだ後、一夏に言い放つ。

「どうにしてもこのクラスで代表にふさわしいのはわたくし、セシリア・オルコットであるとこつことをお忘れなく」

金髪、訂正オルコットはぱぱりと髪を手で払つてきれいに回れ右、そのまま立ち去つていつた。

俺はこちらを見ていた筈に話しかける。

「筈、久しぶりだな。元気だつたか？」

俺が一夏と筈のことを幼なじみだと言つた時からずっとこちらを気にした様子で見ていた。

「…………なぜあの時、私たちの前からいなくなつた?」

「それについてもちゃんと説明する。一夏、学食がどこにあるか教えてくれないか?」

「おー、案内するからつづけてくれ」

教室で話をするより学食で、座つて話したほうがいいだろ?。

「はいはいはいっ!私たちも一緒に行つていい?」

俺たちの話が聞こえたのか、女子が集まり聞いてくる。

「久しぶりに会つた幼馴染と三人で話したいから、今日は遠慮してくれ」

「それも、そうだな。筈もそのほうがいいよな」

「…………ああ」

俺たちの言葉を聞き、集まつた女子が退散していく。

「じゃあ、行くか」

「ああ」

「…………」

俺は一夏の言葉に返事をして、筈は黙つてついてきた。

学食に到着。すゞい混んでるが、今朝までと違い男が一人いることに驚いたのか、集まっていた女子がざあっと道をあける。

「一騎、お前は何食う?」

「うーん。あ、日替わりが鰯の塩焼き定食だからこれでいいや」

「お、じゃあ俺も日替わりで。籌もこれでいいよな。何でも食つよ
なお前」

「ひ、人を犬猫のよつて言つた。私にも好みがある」

「でも、籌つて確かに和食が好きだったよな」

「よ、よく覚えていたな……」

「あ、おばちゃん、日替わつ三つで。食券100でここんですよね?」

一夏はプラスチックの食券をカウンターに置く。俺は籌のほうを
向いて言つ。

「昔のこととは一々一年間一緒に住んでたんだから、籌の好みくら
い覚えてこるや。」

「そ、そりが……」

少し頬を赤くして返事をする筹。やつぱりこのままは昔か
ら変わらないな。

「はー、日替わつ三つお待ひ」

「あつがとつ、おばちゃん。おお、つまそうだ」

「つまそりやなこよ、つまこんだよ」

一夏が恰幅のここ学食のおばちゃんと話してこる間に席を探す。

「一騎、簫、テーブルどつか空いてないか？」

「向こうのテーブルが空いているから、向こうに行こう」

そう言つと、それぞれ自分の分の定食を手にすたすと歩き出す。三人掛けのテーブルに座り、定食に食べ始める。

「席に着いたし、それから今までどうして何をしていたのか話してもらうぞ。一騎」

「わかった」

一夏は焼き鯖の身をほぐしながら話し続ける。簫は味噌汁に口を付けながら、いかにも早く話せという田つきでじゅうりを見ている。

「とりあえず今までどこにいたんだ？おじさんやおばさんが警察に頼んで、捜索願出してもらつても見つからなかつたのに」

「束さんの所にいたんだよ」

「はあつ！？束さんの所にいたつてどづつことだよ。あの人は今行方不明のはずだろ」

「だからその行方不明中の束さんの所に今までいたんだよ」

「……お前からついて行つたのか？」

「はい？」

今まで黙つていた簫が呟く。

「お前からあの人についていきたいと言つたのか？」

先ほどまでは連れ明らかに怒つているという様子で俺を睨みつけてくる。

「あのな、篠。なんで怒っているのか知らないけど、俺から東さんについて行つたわけじゃない」

「じゃあ、なんで私の前からいなくなつた！」

「寝てている間に連れて行かれて、目が覚めたら全く知らない場所に

いたんだぞ！あの時は俺だつて驚いたんだからな！」

「じゃ、じゃあ、お前からあの人について行つたわけじゃないんだな……」

そう言つと、篠は急に不安そうな表情になり、聞いてくる。

「だから、わつきからわづつ言つてるだろ」

「そ、それなら別にいい」

篠はうれしそうといふのが安心したといふのが落ち着いた様子になり、また定食を食べ始める。

「えつと、じゃあ整理すると、一騎は六年前に東さんに拉致られて行方不明になつて、今まで東さんの所にいたけど、俺がIS学園に入学することを一コースで知つたから、IS学園に一騎も入学したといふことでいいのか

「ああ、それでだいたいあつてるな」

一夏が確認するよつと言つた内容を肯定する。

「ところで、一夏。お前、クラス代表つてどういふことだ。なんであのオルコットとかいう金髪はお前に突つかつて来るんだ」

「ああ、それは

「

一夏からクラス代表を決める際のオルコットとのやり取りを聞き、俺は怒りを覚えた。

「やつぱ、今の世の中ああいつ勘違いした馬鹿がいるんだな」「ああ、ほんとむかつくよな」「それで、一夏。お前はHISのことについて何に知ってる?」「何も知らない」「は?」

開き直った様子で叫ぶ一夏に思わず聞抜けな表情をしてしまう。

「一夏、お前参考書はどうした?」「古い電話帳と間違えて捨てた」「お前HISのことについて何から変わってないな」

俺は畠と変わらぬ一夏の様子に少し呆れつつも安心した。

「それで一騎に頼みがあるんだが、HISのことを教えてくれないか? 束さんの所にいたんだつたら、HISのこと詳しいだらうし、このままじゃ来週の勝負で何もできずに負けそうなんだ」「ぐだらない挑発に乗るからだ、馬鹿め」「篠、そう言つな。俺だつてそこまで言われたら我慢できなこれ」「だから、頼むつ」「

一夏が箸を持ったまま、ぱしりと手を合わせて俺を拝んでくる。

「わかった。俺も幼馴染が負けるところを見たくないしな。協力してやる」「一騎、ありがと。助かったよ」「今日の放課後」「ん?」

俺との話がまだあると、篠が一夏に話しかける。

「剣道場に来い。一度、剣の腕がなまつてないか見てやる」
「いや、俺は一騎から一〇〇のことを教えて
見てやる」
「……わかったよ」

その様子に俺は頑固なところは変わってないなと思い、苦笑した。

「どういひことだ」
「いや、どういひことだつて言われても……」

時間は放課後、場所は剣道場。ギャラリーが見ている中、一夏は篠に怒られていた。まあ、手合させを開始してから十分で一本負けすれば当然だよな。

「どうしてこんなに弱くなつていいー?」
「受験勉強してたから、かな?」
「……中学では何部に所属していた」
「帰宅部。三年連続皆勤賞だ」
「なおす」

「はい？」

「鍛え直す！　IS以前の問題だ！」これから毎日、放課後二時間、私が稽古をつけてやる。」

「え、それはちょっと違うな　　ていうか俺は一騎からISのことをだな」

「だから、それ以前の問題と言っている！」

「うわあ。すごい怒ってるな。けど、エラのことも教えないことはまずいし、止めるか。」

「まあまあ、篠落ち着け。確かにここまで剣の腕が鈍っているのは問題だけど、ISの知識が全くないのはさすがにまずい」

「だ、だが

「じゃあ、じうじょう。放課後一時間は俺がISの勉強を教えて、残りの一時間は篠が剣の稽古をつける」

「……わかった」

まだ納得がいかない様子だったが、なんとかうなずいてくれた。

「ちょっと待て！そこは普通一時間半ずつだろ」

「一夏、お前体を動かすのならともかく勉強で一時間集中力が続くのか？」

「ぐつー。」

一夏が文句を言つてきたが、俺が言つと痛いところ突かれた様子で黙る。

「……ふん、軟弱者め」

話が終わると篠は一夏を軽蔑の眼差しで一瞥して更衣室に行つて

しまつた。

「織斑くんてやあ」

「結構弱い?」

「ISほんとに動かせるのかなー」

ひそひそと話すギャラリーの落胆した声が、一夏の惨めさをさら
に大きくしているように見える。

俺は一夏が決意を新たにしたような顔をしているのを見て、これ
なら大丈夫そうだなと思い、話しかける。

「一夏、防具を外し終わつたら寮まで案内してくれ
「わかつた。少し待つてくれ」

俺は一夏の返事を聞きながら、これから一週間どつづ風に教え
るか考え始めた。

第3話 説明（後書き）

主人公設定も投稿します。主人公設定が気になつていての方はそちら
もご覧下さい。

主人公設定（前書き）

第3話と一緒に投稿しました。ネタばれしない程度にしたつもりですが。

主人公設定

名前 鷹野 一騎たかの かずき

性別 男

年齢 15歳（入学時現在）

容姿 身長は一夏と同じくらい。耳にかかるくらいの黒髪で目の色も黒。実年齢より大人っぽく見える。

性格

自分より他人を重んじる性格で、幼い頃に両親を失った経験から、身内が悲しんだり傷ついたりすることを何よりも嫌う。そのため一夏や篠を助ける為になら自分の命ですらも投げ出す覚悟がある。織斑姉弟と篠ノ乃姉妹の4人は名前で呼ぶが、それ以外の人に関しては基本的に名字で呼ぶ。女子のほうが強いとか、偉いと考えている人間が嫌い。

特技 家事全般、剣道（一夏や篠より弱い）

専用I S 『あかつき』

詳細

一夏と篠の幼馴染。両親が篠ノ乃夫婦の親友であり、篠ノ乃家の近所に住んでいた。そのため篠ノ乃道場に通い、剣道を教わっていた。小学2年生の時に交通事故で両親を亡くしており、その後は篠ノ乃家に引き取られお世話になっていた。小学4年生の時に東が失踪する際に拉致されたため、行方不明になっていた。その後、東からI

Sについて学びながら一緒に生活していたため、ISに関しての知識量は同年代と比べてはるかに豊富である。また、束の身の回りの世話もしていたため、家事全般が得意になつた。一夏がIS学園に入学したことをきっかけに束が声明を発表したため、一騎もIS学園に入学することになった。

主人公設定（後書き）

第4話の投稿は2月10日になると思います。次回もお楽しみください。

第4話 回顧（おもかげ）

一騎と笄にイベント発生ーー！

わあ、いつたじどうなるーー？

それでは、第4話をお楽しみください。

「一夏、とりあえず授業を集中して受ける。授業中に理解できればそれでいいし、理解できなくともわからないところがはつきりしていれば、そのほうが教える側としても教えやすいからな」

「ああ、わかった」

俺と一夏は剣道場を出て、今後のことについて話しながら寮に向かって歩く。

「あ、鷹野くん。ここにいたんですね。見つかってよかったです」「はい？」

いきなり呼ぶ声が聞こえたので、声が聞こえる方向に顔を向ける。その先には山田先生がメモ用紙っぽい紙を一枚、キーを一個持ちながら立っていた。

俺はどうしてこんな時間に山田先生が俺を探していたのか気になり、理由を聞いてみる。

「山田先生、どうしたんですか？」

「はい。えつとですね、寮の部屋を教えていなかつたので、伝えようと思つて」

山田先生は俺に説明しながら、持っていたメモ用紙とキーを手渡していく。

どうやら、メモ用紙は部屋の番号が書かれているようだ、『1025室』と書かれてあった。

……そういえば、後で寮の部屋を教えるって言われていたけど、すっかり忘れてたな。

……あれ、そういうえば

「一夏はどうしてるんだ? 自宅から通つていいのか?」

「……俺は千冬姉と一緒にだ」

「……」

「……一夏」

「……何だ」

「……どんまい」

俺は一夏の肩に手を置き、やつとしきとしかできなかつた。

「じゃあ、これから部屋に行つてくださいね。夕食は六時から七時、寮の一年生用食堂で取つてください。ちなみに各部屋にはシャワーがありますけど、大浴場もあります。学年ごとに使える時間が違いますけど……えっと、その、昨日織斑くんにも言つましたけど今のところ使えません」

「それって女子用の大浴場しかないつてことですよね?」

俺は使用できない理由に思い当たつ、それを言つてみる。

「は、はい。やつです。織斑くんと同じことを言わなくて良かつたです」

「一夏、お前まさか なんで入れないんですか? とでも聞いたのか?」

風呂好きの一夏なりとそつた言葉を言つてみる。

「え、そうだけど」

「……お前、少しほ考えてから発言じろ」

俺たち一人以外全員女子のこの学園で迂闊な発言をしたら、命に
関わる事態になるだろ？

「えっと、それじゃあ私は用があるので、これで。一人とも、ちや
んと寮に行つてくださいね」

山田先生はそう言つと、校舎の方に歩いて行つた。
寮が目の前に見えている状況で言われても……。どんだけ心配性
なんだ？

「そんじゃ一騎、寮に行こいつぜ」

「ああ、そうだな」

俺たちは先ほどと同じように話しながら、寮に向かつて行つた。

寮に到着して、一夏と別れた後『1025室』の前に来た。来た
ことには来たんだが、

「どう見ても一人部屋だよな」

「いつまでも部屋の前にいるわけにはいかないので、とりあえずノックしてみる。」

コンコン

返事がない……。同居人が留守の可能性もあるため、仕方なく俺は部屋に入る。

ドアを開いて部屋に入る。すると、目に入るのは大きめのベッド。明らかにそこらへんのビジネスホテルよりいい代物が一つ並んでいる。一つ並んでいるベッドを見て、自分の考えが正しいことを確認する。

となると、問題はその同居人だ。部屋の中について着替えている最中だったらかなり気まずい事になっていたが、いないなら問題ない。そこまで考えて俺は自分の考えが甘かったことを思い知らされることになる。

「すまない、シャワーを浴びていて出られなかつた。」

ちょっと待つた。この声は……。

「こんな格好ですまないな。それで何の用だ？」

「ほ、雛……」

シャワー室から出てきたのは、今日再会を果たした幼馴染の一人だつた。

雛は別の部屋の女子が用があつて入ってきたと思ったのか、体に白いバスタオル一枚を巻いただけの姿だつた。

白いバスタオルの面積は色々な意味でギリギリで、その端から下は瑞々しい太腿が露出している。シャワーを浴びていたのを証明するように、つうつ……と水滴が脚線を滑り落ちる。健康的な白さを持つた肌が眩しく見える。

その上のぐびれた腰はよく鍛えられた体であることをタオルの上からも証明しており、引き締まつていて、それでいて女性的なラインを主張している。

タオルを押さえている手の下では、束さん程ではないが、かなり大きい胸の膨らみが見える。さすがは姉妹、篠つて束さんと一緒に着やせするタイプなんだな。

ここまで考えて、自分の思考世界から現実世界に戻る。

「 「…………」 」

お互いその場から固まり、十分にも一十分にも感じる数秒間の沈黙が続く。

「か、か、か、か、すき…………？」

「あ、ああ…………」

俺が返事をすると同時に、篠はボツと顔を真っ赤にする。束さんと違つて、普通の反応をしてくれる篠に少しうれしく思つたが、内緒にしておく。

「…………つ！？ み、見るな！」

「わ、悪い！」

慌てて体を篠の居る方向から、自分の真後ろに向ける。

「な、な、なぜ、お前が、ここに、いる…………？」

真後ろからギギギギ……といつ音が聞こえてきそうにならぬ、ギリギリの声で篠が俺に聞いてくる。

「いや、実は俺もこの部屋で住むことになったんだけど

」

言った瞬間、真後ろから殺氣を感じ、とっさに後ろを向き俺の方に向に上段打突の構えで飛んでくる木刀を真剣白羽取りのよつに両手で挟んで止める。

「お、お、お前が、わ、私の、同居人だと、い、言つのか？」
「メモ用紙に、書かれていた、番号と、キーの番号、が、この部屋なんだよ」

筈はこのまま押し切ろうと力をかけてくる状態で話し、俺はそれを必死になつて止めながら話す。

「ど、どうい、つもり、だ」
「何、がだ？」
「どうい、つもりだと、聞いてい、る！」

俺と筈は膠着状態で話し続ける。だが、それがまずかった。筈は白いタオルを申し訳程度に体に巻きつけ、木刀を持っている。

つまり、その状態で叫んだり、激しく動いたりすれば申し訳程度に巻かれたタオルはすぐさま重力によつて、床に落ちるわけで。

「あつ……！」

筈の体を隠していたタオルが落ちるが、両手に木刀を持っているため、抑えることができず、女性からしてみれば羨ましい体のすべてが露わになる。

「ツ~~~~~！」

俺はとつさの出来事で反応できず、顔どころか全身を真っ赤に染めた箒が木刀を振りかぶる姿を最後に、頭に響く爆音によつて意識を失つた。

第4話 同居（後書き）

気づいてくる方もいらっしゃいましたが、一夏は千冬ちゃんと同じ部屋です。

篠は更衣室で着替えた後、汗を流すために浴室のシャワー室に来て、シャワーを浴びているところに一騎が部屋に入ってきたイベントが発生…！

そして一騎は篠の全裸を目に焼き付けて氣絶。

このイベントが次回にどうの影響するのか。次回を楽しみにしていてください。

第5話 試合（前書き）

更新が不定期になると書いたものの、まさか1-2日間も更新できないことは作者も予想していませんでした。本当に申し訳ございません。

更新を待ち望んでいた方々、第5話を楽しんで下さい。

俺が目を覚ますと、次の日の朝になっていた。朝の八時前に目が覚めて、遅刻しなかつたのは幸いだつたとしか言いようがない。俺を気絶させた張本人の幕は、俺が目を覚ましたことに気づくとすぐさま謝ってきた。さすがに半日以上も気絶するとは思っていなかつたらしく罪悪感がわいたらしい。

そして、今田は週の月曜日、一夏とオルコットの対決の日。あ
れから五日間、一夏に俺がE.Sの勉強を、筈が剣道の稽古をみつ
りやつた。

は困る。

たた問題があるとすれば、いまだに一夏の専用機が来ていないこ
とだ。

.....

俺と一夏と篠は第三アリーナ・アピットで沈黙している。

「お、織斑くん織斑くん織斑くんっ！」

三度も一夏の名前を読んで、山田先生が駆け足でやって来た。あわててふためいた様子で、転んでもおかしくないと毎回思つ。

「はい、セイで止めて」

「うう」

「」の人には冗談が通じないのか?と思つていると、山田先生の顔がどんどん赤くなつていいく。

「.....」

「.....ふはあつ! ま、まだですかあ?」

「」とか一夏。お前そんなことをしてくると.....、

「パンツ!」

「田上の人間には敬意を払え、馬鹿者」

「千冬姉.....」

「パンツ!」

「織斑先生と呼べ。学習しろ。ともなぐば死ね」

明らかに教師が言つセリフではないな。といつが出席簿を「」に持つてくる必要があるのか?

「そ、そ、それでですねつ! 来ました! 織斑くんの専用I-S!」
「織斑、すぐに準備をしろ。アリーナを使用できる時間は限られているからな。ぶつけ本番でものにしろ」

「この程度の障害、男子たるもの軽く乗り越えてみせね。一夏」

「え? え? なん.....」

「「「早く!」」」

「一夏、ボケつとしてる暇はないぞ。急げ!」

山田先生、千冬さん、第の声が重なつた後に、俺も一夏を急かす。
「」んつ、と鈍い音がして、ピットの搬入口が開く斜めに噛み合
うタイプの防壁扉は、重い駆動音を響かせながらゆっくりとその向

「いつ側を晒していくべ。

『そこ』、『白』が、いた。

眩しい程の純白を纏つたヒロを見て、俺はあるヒロを思い浮かべる。

『白騎士』。

たぶん、このヒロには千冬さんと束さんの二人が関わっている気がする。

「これが……」

「はい！ 織斑くんの専用ヒロ『白式』です！」

「体を動かせ。すぐに装着しろ。時間がないからフォーマットとフィットティングは実践でやれ。できなければ負けるだけだ。わかつたな」

一夏は千冬さんに急かされて、白式に触れる。

「背中を預けるように、ああそつだ。座る感じでいい。後はシステムが最適化する」

「あ」

「ヒロのハイパーセンサーは間違いなく動いているな。一夏、気分は悪くないか？」

一夏が千冬さんの言葉通りに、白式に体を任せた。途中で声を上げたが、おそらくハイパーセンサーがオルコットのヒロを感知したのだろう。

「大丈夫、千冬姉。いける」

「そうか」

つまく隠しているが、千冬さんは一夏をかなり心配してゐみたいだな。一夏を名前で呼んでいるのを自分で気づかないほどだし。

「一騎、第」

「な、なんだ?」

「ん?」

「行つてくる」

「あ……ああ。勝つてこい」

「お前なら勝てるや、一夏」

一夏に呼ばれて、返事をすると、一夏は俺たちの言葉に首肯で応えて、ピット・ゲートに進んだ。そして、ゲートが開放されると、『敵』が待つてゐるアリーナ・ステージへと飛び出して行つた。

side 一夏

「あら、逃げずに来ましたのね」

セシリ亞がふふんと鼻を鳴らす。また腰に手を当てた。ポーズが様になつてゐる。

けれど俺の関心はそんなところにはない。そんなところには、ハイパー・センサーは感知しない。

鮮やかな青色の機体『ブルー・ティアーズ』。その外見は、特徴的なフイン・アーマーを四枚背に背に従え、どこか王國騎士のよつな気高さを感じさせる。

それを駆るセシリ亞の手には長大な銃器
径特殊レーザーライフル『スター・ライトmk

?』と一致 が握られていた。IISは元々宇宙空間での活動を前提に作られてゐるので、原則空中に浮いてゐる。そのため自

分の背丈より大きな武器を使うのは珍しくない。

アリーナ・ステージは直径200メートル。発射から目標到達までの予測時間0・4秒。すでに試合開始の鐘は鳴っているので、いつ撃つてもおかしくはない。

「最後のチャンスを上げますわ」

腰に当てた手を俺の方に、びつと人差し指を突き出した状態で向けてくる。左手の銃は、余裕なのかまだ砲口が下がったままだ。

「チャンスつて？」

「わたくしが一方的な勝利を得るのは自明の理。ですから、ボロボロの惨めな姿を晒したくなれば、今ここで謝るというのなら、許してあげない」とことなくつてよ」

そう言つて目を笑みに細める。

左目が射撃モードに移行。セーフティのロック解除を確認。ISが告げる情報を、俺は一度飲み込んでから整理する。そうしないと、あつという間に飲み込まれてしまいそうだ。セシリ亞にも、白式にも。

「そういうのはチャンスとは言わないな」

「そう？ 残念ですわ。それなら

「

警告！敵IS射撃体勢に移行。トリガー確認、初弾工ネルギー装填。

「お別れですわね！」

Side out

俺たち4人は一夏がアリーナ・ステージに飛び出して行ったのを見送った後、ピットのリアルタイムモニターから戦闘の様子を見ていた。

モニターからキュインッ！という耳をつんざくような独特の音がすると同時に走った閃光が一夏の体を撃ちぬく。白式のオートガードによつて守られたみたいだが、痛みがないわけではない。

一夏に弾雨のごとき攻撃が降り注ぐ。一夏は必死になつて避けようとするが、そのすべてが的確に狙つているため避けきれず攻撃を喰らう。

一夏の右腕から光の粒子が放出され、近接ブレードの形となつて、手に収まつた。

一夏は攻撃をかわしながら、オルコットとの距離を詰めようとすると、『ブルー・ティアーズ』から外れたفين状のパーティからレーザーが放たれ、近づくことができない。

それから約30分間。一夏のIISはダメージを受け、半分ほど装甲を失つてあり、実体ダメージが中破と思われる状態になつてしまつた。おそらくシールドエネルギーの残量も100を切つてているだろう。

しかし、勝ち目がないわけじゃない。オルコットはまだ自分の方が強いと油断している。あとは、一夏がオルコットの操るピットの弱点に気がつければ勝てる可能性はまだある。

モニターに映る一夏がピットから放たれるレーザーをよけ、一閃。ピットを真つ二つにした。オルコットに向けて、切り込んだあと、続けざまに飛んでくる一機のピットの内、一機のスラスターを破壊

して落とした。

「どうやらオルゴットの操るビットの弱点に気が付いたようだな。それに籌との訓練よつて鈍つっていた感覚を取り戻したため、集中力も切れていない。」

「はああ……。すういですねえ、織斑くん」

一緒にモニターを見ていた山田先生がため息混じりに呟く。籌も先ほどよりも少し安心した表情をしている。

しかし、千冬さんは対照的に忌々しげな顔をしている。俺も一夏の左手を見て、顔をしかめた。

「あの馬鹿者。浮かれているな。」

「えっ？ どうしてわかるんですか？」

「さつきから左手を閉じたり開いたりしているだらつ。あれは、あいつの昔からのクセだ。あれが出るときは、大抵簡単なミスをする。」

「へえええ……。さすが姉弟ですねー。そんな細かいことまでわかるなんて」

そう千冬さんの言つように、一夏のあのクセが出るときは、簡単なミスをする。そして、そのミスによつてほとんどと黙つていいほど負けれる。

「ま、まあ、なんだ。あれでも一応私の弟だからな……」

「あー、照れてるんですかー？ 照れてるんですねー？」

「別に照れなくてもいいと思つけどな」

「……」

ぎつりつりつりつ。千冬さんが無言でヘッドロックをかけよつとして

きたが、山田先生を身代わりにして逃れる。

「いたたたたたつ！？」

「私はからかわれるのが嫌いだ」

「はつ、はいつ！ わかりました！ わかりましたから、鷹野君も見てないで、助け あつひつ！」

騒いでいる山田先生を無視して、試合開始から無言でずっとモニターを見つめている筈の方に顔を向ける。心なしか、険しい表情をしているが、その表情からは不安な様子が感じ取れる。

「…………」

筈がほんのわずかだけ唇を噛んだ次の瞬間、

ドカアアアンッ！！

爆発音と白い光によつてモニターが見えなくなつた。

「なつ…………！」

「一夏つ…………！」

俺は筈が思わず声をあげた瞬間、筈の方に向けていた顔を戻し、モニターを見つめる。

さつきまで騒いでいた千冬さんと山田先生も、爆発の黒煙に埋もつた画面を真剣な面持ちで注視している。

「ふん」

黒煙が晴れたとき、千冬さんが鼻を鳴らした。俺はまだかすかに

漂つている煙の中から光の粒子を見つけ、安堵の表情をする。

「機体に救われたな、馬鹿者め」

「ギリギリだつたな」

煙が弾けるように吹き飛ばされ、その中心に真の姿でたたずむ純白の機体がいた。

一夏はオルコットの命令で飛んでくるビットを横一閃で両断する。爆発した次の瞬間、一夏はオルコットに突撃する。

オルコットの懷に飛び込んだ一夏は、光を帯びた日本刀のような刀身の近接ブレードで下段から上段への逆袈裟払いを放つ。それを見て、俺は一夏の勝利を確信したが、次の瞬間決着を告げるブザーが鳴り響いた。

『試合終了。勝者 セルシア・オルコット』

「はあッ！？」

俺はわけがわからず、思わず声を上げてしまった。試合を見守っていた筈と山田先生も声を上げなかつたが、「なんで？」という表情をしている。

ただひとり、呆れたように「やれやれ」という表情をしている筈さんを見て、俺は『白式』を見たときに考えたことを思い出す。

もし『白式』に千冬さんと束さんが関わっていて、先ほどの『白式』の装備が『雪片』だとしたら、その特殊能力は

「零落白夜」
れいりくびやくや

俺の呟きが聞こえたのか、千冬さんが驚いた様子でこちらに顔を向けるが、俺はそれに気づかずモニターに映る『白式』を茫然と眺めていた。

第5話 試合（後書き）

今回は一夏とオルコットの試合のため一騎の出番があまりないといった事態になりました。

活動報告に書いたとおり次回の更新は未定です。できる限り早く更新しようと思つているので、次回の更新を楽しみにしてください。

第6話 決定（前書き）

長い間更新せず申し訳ありません。
第6話を投稿しました。
お楽しみください。

第6話 決定

「よくもまあ、持ち上げてくれたものだ。それでこの結果か、大馬鹿者」

試合が終わり、ピットに戻ってきた一夏は千冬さんに怒られていた。

まあ、当然と言えば当然だな。相手の攻撃を喰らって負けたのではなく、自滅して負けたのだから。

「武器の特性を考えずに使つからああなるのだ。身をもつてわかつただろう。明日からは訓練に励め。暇があればI-Sを起動しろ。いいな」

「……はい」

一夏が千冬さんの言葉に頷き、山田先生から分厚い本を受け取る。俺はその様子を見ながら、『白式』について考えていた。

『白式』の武器が、千冬の使つていた武器『雪片』の後継でもある可能性が高い。けど、それは別にたいした問題じゃない。問題は『白式』が『零落白夜』を使つた可能性が高いということだ。『零落白夜』を使つたとこのなら、先ほど自滅して負けた理由を説明することができる。だが、本来別の機体で同じ単一仕様能力が発現することはない。これは東さん本人から聞いたことだから間違いない。いったいどういうことなんだ？

「何にしても今日はこれでおしまいだ。帰つて休め」

千冬さんの言葉が耳に入り、いつたん考えるのをやめると箸が近

づこってきた。

「帰るぞ」

篠の言葉に俺と一夏は寮への道のりを歩き始める。

「…………」

「な、なんだよ？」

三人横に並んで歩いていると、篠がじいじと一夏を見てくる。
慰めの言葉でもかけようとしているのか？

「負け犬」

慰めの言葉どいか、さつき負けたばかりの傷をえぐる言葉を一夏に言った。

「篠もやつてやるなよ。IRSを操縦するのが一度田で、しかもフォーマジアとファイットティングが終わっていない専用機をぶつけて本番で操縦したんだ。負けても仕方ないだろ」

「だ、だが、私と一騎が一人で付きつきりで教えてやつたのに負けたんだぞ（そのせいで一騎と二人きりになれる時間が少なかつたと
いうの）」

「確かにそうだけど、さすがに一週間じゃIRSの基礎の基礎しか教えることができなかつたしな」

「ちょ、ちょっと待て！ あれで基礎の基礎なのか！」

「あのなあ、一夏。あの分厚い本の量がそつ簡単に終わるわけないだろ」

俺がそつ言つと、一夏はがくくと肩を落とした。その様子を見

ながら、一夏に今日負けたことをどう思つて居るか問い合わせる。

「一夏、今日試合に負けたことをどう思つた？」

「どうして、そりや、まあ。悔しこそ」

「そうか。それなら、いいわ」

「何がいいんだよ。俺が負けたことか？」

「違う。俺が言つて居るのは、負けたことを悔しことを思つて居る」とをいって言つてるんだ」

「は？ 負けて悔しいと思つのは当然だろ」

「当然といえば当然だが、悔しいと思つるのは勝つために努力したから悔しいと思うんだ。全く努力していない奴は思わないわ」

俺がそう言つと、一夏はなるほど、と言つて頷く。そして、そのまま急に立ち止まつてしまつ。

「一夏？」

「……」

急に立ち止まり、考え込み始めた様子の一夏に声をかけてみるが、返事がない。

「一夏、いきなり立ち止まつてどうしたといつのだ？」

「……一人とも、俺にE-Sの操縦を教えてくれないか？」

「頼まれなくとも教えるつもりだつたが、どうしたんだ？」

「俺が負けて悔しいってのももちろんあるけど、それ以上に千冬姉に恥をかかせたままじゃいられないからな」

俺が一夏に理由を聞くと、なんとも一夏らしい理由が返ってきた。

「わかった。負けたからクラス代表にはならなかつたわけだし、時

間はたっぷりあるんだ。しっかりと鍛えてやるよ。筹も協力してくれ

れ」「わ、わかった。（一騎と一入りになれる時間がまた減るな）

「二人とも、ありがとうな

「とりあえず今日は部屋に戻つてゆっくり休むぞ」

「ああ」

一夏のエリの訓練をする約束をして、俺たちは寮に向かつてまた歩き出した。

翌日、朝のショートホームルーム。一夏にとつてありえない」とが起きていた。

「では、一年一組のクラス代表は織斑一夏くんに決定です。あ、一繫がりでいい感じですね！」

山田先生が嬉々として喋っている。そしてクラスの女子が大いに盛り上がっている中、暗い顔をしているのは一夏だけだ。

「先生、質問です」

暗い顔をしている一夏が手を挙げて質問する。

「俺は昨日の試合に負けたんですが、なんでクラス代表になつてるんでしょうか？」

「それは

「それはわたくしが辞退したからですわ！」

がたんとイスから立ち上がり、オルコットが言う。昨日までと違
い機嫌が良さそうに見えるが、一夏と戦つたことによって考えが変
わつたのか？いや、それより一夏がフラグを建てたことによって変
わつた可能性の方が高いか。

「まあ、勝負はあなたの負けでしたが、しかしそれは考えてみれば
当然のこと。なにせわたくしセシリア・オルコットが相手だったの
ですから。それは仕方のないことですわ」

まあ、ISを動かすのが一回田なんだから、一夏が負けるのは當
然だよな。

「それで、まあ、わたくしも大人げなく怒つたことを反省しまして、
“一夏さん”にクラス代表を譲ることにしましたわやはりIS操縦
には実戦が何よりの糧。クラス代表ともなれば戦いには事欠きませ
んもの」

オルコットが一夏にフラグを建てられたことは確定だな。

「いやあ、セシリアわかってるね！」

「そうだよねー。せつかく世界でISを使える男子がいるんだから、
同じクラスになつた以上持ち上げないとねー」

「私たちは貴重な経験を積める。他のクラスの子に情報が売れる。

一粒で二度おいしいね、織斑くんたちは

とりあえず最後に言つた子はほどほどにしかないと、千冬さんに怒られるだろうから氣をつけた方がいいな。

「そ、それですわね。わたくしのように優秀かつエレガント、華麗にしてパーフェクトな人間がＩＳ操縦を教えて差し上げれば、一夏さんも見る見るうちに成長を遂げ

バンッ！

「結構だッ！」

突然、篠が机を叩いて立ち上がり、オルコットを睨みつけながら言つ。

「あいにくだが、一夏の教官は足りてない。私と一緒に二人で教えると約束したのだからな」

「あら、貴方はＩＳランクＣの篠ノえさん。Ａのわたくしに何かご用かしら？」

「ら、ランクは関係ない。私と一緒に一騎が頼まれたのだ。そ、それに一騎は専用機持ちなのだから何も問題ない」

「え、篠つてランクＣなのか……？」

「だ、だからランクは関係無いと言つていいるー」

篠がランクＣなのは意外だったが、あくまでもランクは今現在の適性を表しているだけだ。これから変わる可能性もあるから、あまり意味がないけどな。

「座れ、馬鹿ども」

すたすたと歩いて行つてオルコットと篠の頭をばしんと叩いた千

冬さんが低い声で告げる。

さすがに千冬さんには逆らえないため、二人はまだ何か言いたそうな顔をしながら座った。

「お前たちのランクなど「ゴミ」だ。私からしたらどれも平等にひよっこだ。まだ殻も破れていらない段階で優劣を付けるな。代表候補生でも一から勉強してもらいつと前に言つただろう。下らん揉め事を私の管轄時間でするな」

バシン！

「……お前、今何か無礼なことを考えていただろう」

「そんなことはまったくありません」

「ほう」

バシンバシン！！

「すみませんでした」

「わかればいい」

一夏が何を考えていたのかは知らんが、千冬さんが叩いたということは千冬さんに関することを考えていたんだろうな。たとえば、千冬さんの生活態度とか。

「クラス代表は織斑一夏。異存はないな」

はーいと（俺と一夏と筆を除く）クラス全員一丸となつて返事をした。

俺はとりあえず休み時間になつたら一夏を慰めよつと心に決めた。

第6話 決定（後書き）

前書きで書きましたが、長い間更新せず本当に申し訳ありませんでした。

言い訳に聞こえると思いますが、実は1~5のアニメを見ていたら、鈴やシャルロットがヒロインの小説案が頭に浮かび、その小説の主人公やストーリーの設定を考えているうちに『暁の空』のストーリーが思い浮かばなくなってしましました。

言い訳に聞こえるじゃなくて、言い訳にしか聞こえませんよね。本当にすみません。

次の更新はいつになるかわかりませんが、文庫本を読み返して、ストーリーを再構築しているので、第7話を楽しみにして待つていただけたら幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5484q/>

IS インフィニット・ストラatos ~暁の空~

2011年3月13日05時34分発行